

リサイクル適性(A)  
この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。

R70  
古紙パルプ配合率70%再生紙を使用



# 環境報告書 2018



東京学芸大学



国立大学法人  
東京学芸大学  
Tokyo Gakugei University

〒184-8501  
東京都小金井市貫井北町 4-1-1  
Tel.042-329-7111  
www.u-gakugei.ac.jp

## 目次

Top Message	01
大学概要	02
環境マネジメント組織体制	03
環境配慮の取り組み	04-05
学芸の森推進部門	06-07
環境学習推進部門	08-09
環境改善企画部門	09-10
環境創造地域連携部門	11-12
環境パフォーマンス	13-15
環境教育研究センターの紹介	16
第3者意見・機構長より・環境配慮促進法準拠状況	17

## 編集方針

本報告書は、「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」にもとづき、本学が取り組んでいる環境整備・保全に関する方針・活動を皆様にご理解いただくと共に、「学芸の森」及び自然を共に守り・育て・継承していくための資料・教材として多くの方々に活用していただけることを目指しています。

学芸の森環境機構

- 参考としたガイドライン  
環境省「環境報告ガイドライン（2012年版）」
- 報告書の対象範囲  
小金井キャンパス、ならびにその他地区（各附属学校）
- 報告書の対象期間・発行  
対象期間 平成29年4月（2017年4月）  
～平成30年4月（2018年4月）  
発行 平成30年9月（次回：2019年9月発行予定）
- 環境報告書は東京学芸大学のホームページで公表しています。  
<http://www.u-gakugei.ac.jp/jouhou/01/>

## 環境憲章

### 基本理念

「教育への情熱・知の創造」をモットーに「有為の教育者」の育成を目指す東京学芸大学は、地球環境問題が焦点の課題となっていることを深く認識し、継続的な人類の発展に寄与するために、地球環境の保全と充実に向けた教育活動を積極的に展開する。

また、緑豊かな自然を保持する本学は、建学以来育んできた「学芸の森」をかけがえのない教育研究環境として守り発展させ、周辺地域の自然環境との調和に努めつつ、多彩な環境パートナーシップを構築する。

### 基本方針

- 1 本学のあらゆる活動から生ずる環境負荷を認識し、環境汚染の防止、エネルギー使用量・廃棄物排出量の削減、資源リサイクル量の向上をはかり、園児・児童・生徒・学生・教職員などの心身の健康を図ると共に、環境への自覚を高める。
- 2 地球環境や地域環境を保全・改善するための研究活動及び環境教育・環境学習活動を推進し、公開講座等を通じて環境問題の啓発、普及に務め、循環型社会の担い手となる優れた人材の育成に努める。
- 3 大学及び附属学校・園の自然環境の保全・充実に努め、「学芸の森」の学術的・教育的価値を更に高めると共に、地域社会と連携し、園児・児童・生徒・学生・教職員・地域住民等の多様で主体的な環境活動を推進する。
- 4 「学芸の森環境機構」を中心とする環境マネジメントを構築し、武蔵野の風土と文化を生かした自然環境を形成し、学生も参加した定期的な環境監査等を実施する。
- 5 環境に関する法規、条例、協定及び学内規定を遵守する。

## TOP MESSAGE

本学を訪れる多くの方々は、正門から入られると桜並木から続く広大なウッドデッキとその周囲のケヤキに圧倒され、東門より入らば、ケヤキの壮大な並木に迎えられよう、この学芸の森への畏怖と敬意、自然への尊崇をほぼ例外なく口にされます。特に、都心の緑少なき地より来られた方は、武蔵野の森の緑に抱かれた快感を感じ取られるようで、しみじみと「緑の環境の心地よさ」に感嘆されています。

日常的にこの環境に暮らしている方々には案外とその良さを認識するよりも、むしろ当たり前の風景として溶け込んだものとして気にされないものなのかもしれません。改めて新緑の季節に感じられる豊かさを満喫しているところです。

しかし、こうした環境の維持にはコストがかかるということを忘れることはできません。地球環境の温暖化対策として、CO<sub>2</sub>削減への法的カウント可能な緑の環境には程遠い広さでしかない指摘されても、やはりこの広さには宝を感じ、貴重な存在であると認識しております。

ハケの地でもあり、地下水を利用する本学においては、浸透枿による地下水への貢献、その他多くの環境負荷を軽減する取り組みを通じて、環境への配慮を推し進めているところであります。

本学の「学芸の森環境機構」では、教育の森としての機能を高めるために五つの部門がそれぞれ年間を通じて計画的な活動を行っております。また、専門職としての施設課をはじめ関連する部局が一体となって取り組んでいることも見逃すことはできません。

養老孟司さんが岡田武史さん（サッカー日本代表元監督）との対談（朝日新聞2011年9月1日）で、環境問題を提起する岡田さんに対し、「そこから考えるべきで、環境という言葉を使わないほうがいいんじゃないか。『環境』はどうしてできたかを考えると、『自分をたてた』から。自分を区切ると、自分の外に環境がある。昔の人はそうは思っていなかった。死ねば、土に返ると。（後略）」と述べておられる。それを受けて岡田さんは、「人類と地球を分けているうちはだめ。人間と自然を分けているうちは。（後略）」と相槌を打っています。

本学の自然と一体となった学生、教職員、地域の方々の協働により今後も学芸の森を大切に、愛おしく、未来の世代に引き継いでまいりたいと考えます。

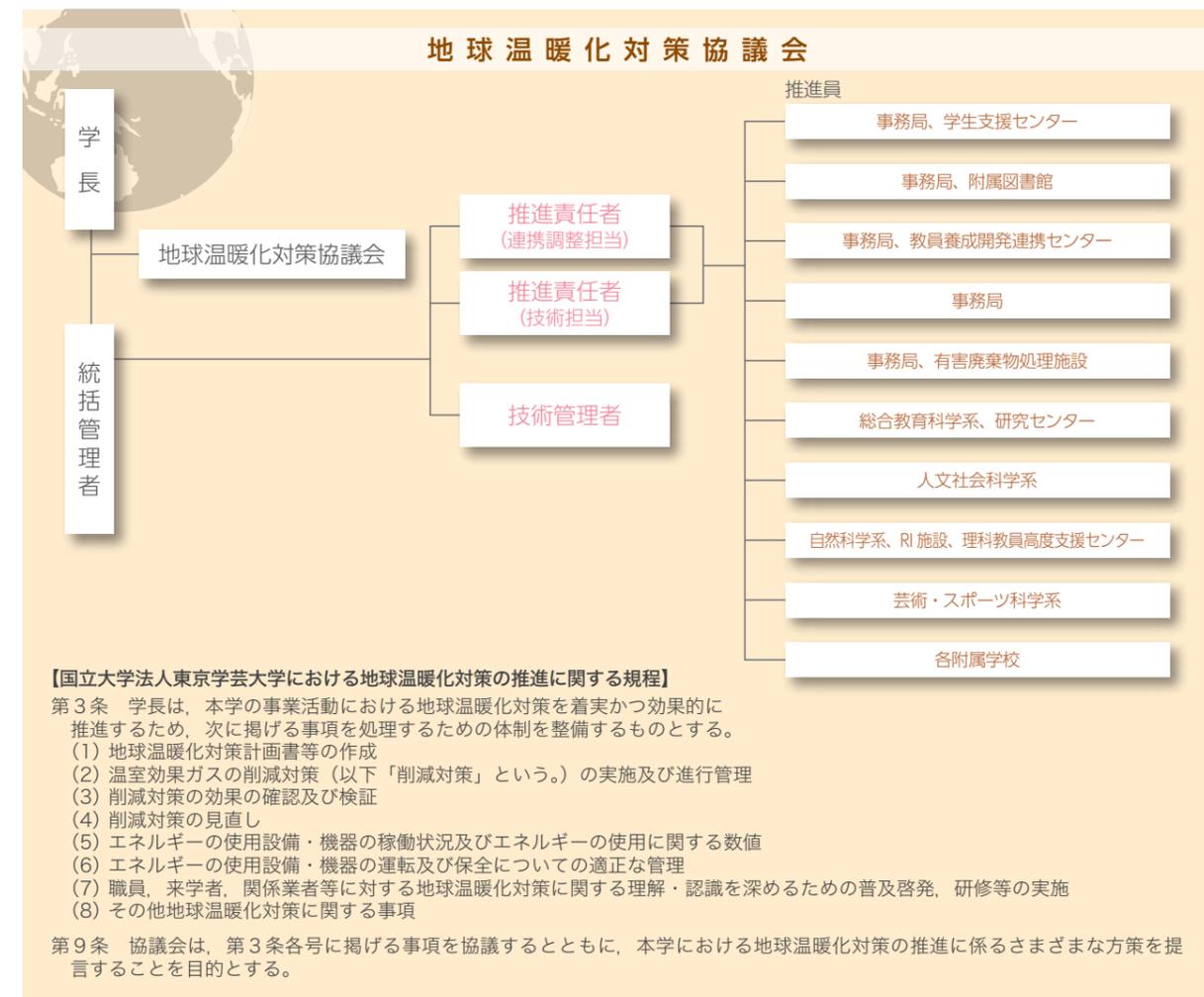
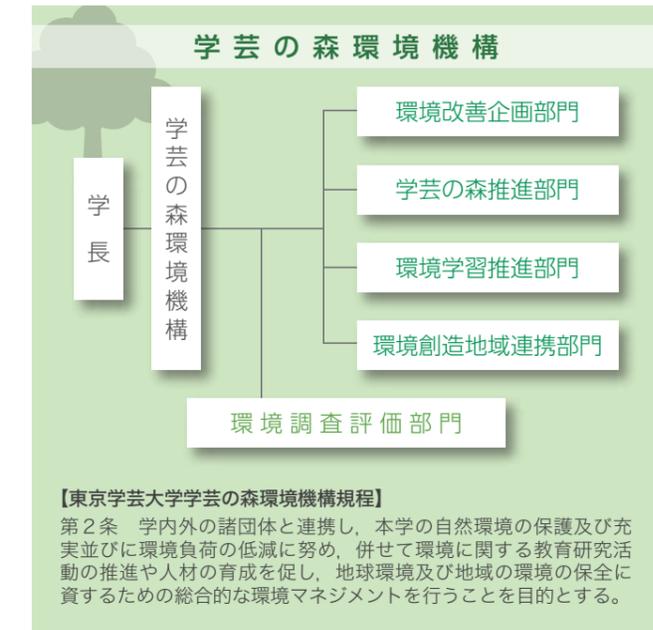


国立大学法人 東京学芸大学 学長

## 東京学芸大学の概要 (H29.5.1 現在)

※附属学校在学者数( )内の数字は海外帰国児童・生徒

小金井団地			
敷地面積	306,894㎡	延べ床面積	107,784㎡
小金井キャンパス			
東京学芸大学	在学者数	4,664名	
・教育学部	在学者数	830名	
・大学院	在学者数	29名	
・特別専攻科			
事務局		放射性同位元素総合実験施設	
附属図書館		有害廃棄物処理施設	
環境教育研究センター		理科教員高度支援センター	
教育実践研究支援センター		学生相談センター	
留学生センター		学生キャリア支援センター	
国際教育センター		教員養成開発連携センター	
教員養成カリキュラム開発研究センター		国際交流会館	
保健管理センター		附属学校運営部	
情報処理センター			
小金井地区			
・附属幼稚園小金井園舎	在学者数	150名	
・附属小金井小学校	在学者数	619名	
・附属小金井中学校	在学者数	477名	
世田谷地区			
・附属世田谷小学校	敷地面積	28,393㎡	延べ床面積 7,327㎡
	在学者数	617名	
・附属世田谷中学校	敷地面積	20,307㎡	延べ床面積 6,001㎡
	在学者数	478名	
・附属高等学校	敷地面積	53,209㎡	延べ床面積 12,141㎡
	在学者数	981 (42) 名	タイ国留学生 1 名を含む
大泉地区			
敷地面積	60,719㎡	延べ床面積	19,236㎡
・附属大泉小学校	在学者数	577 (43) 名	
・附属国際中等教育学校	在学者数	729 (292) 名	
大泉寮			
竹早地区			
敷地面積	18,728㎡	延べ床面積	13,506㎡
・附属幼稚園竹早園舎	在学者数	59名	
・附属竹早小学校	在学者数	416名	
・附属竹早中学校	在学者数	479名	
東久留米地区			
敷地面積	24,230㎡		
・附属特別支援学校	在学者数	73名	延べ床面積 4,631㎡
東久留米国際学生宿舎 (成美荘を含む)			
学生寮			
大泉寮	敷地面積	大泉地区に含む	延べ床面積 2,415㎡
小平寮	敷地面積	4,233㎡	延べ床面積 2,995㎡
東久留米国際学生宿舎	敷地面積	13,064㎡	延べ床面積 3,117㎡



# 環境配慮の取り組み

## ■ 東京学芸大学 省エネ対策について

東京学芸大学（小金井キャンパス）は「2015年から2019年度までの5年間で基準年度の17%の削減（CO<sub>2</sub>換算）」に加えて、大学全体では省エネルギー法による「毎年1%以上のエネルギー消費原単位の削減」の達成を目指し、以下の対策を行いました。

### クールビズ・ウォームビズの実施

夏季は5月1日～10月31日、冬季は11月1日～3月31日に実施しました。

### 省エネ・節電ポスター及び省エネマニュアルによる省エネの実施

### 「省エネ・節電取組チェック」のアンケートによる確認

大学教員（特任、非常勤教員等を含む）、附属学校教員（常勤）、職員（常勤、非常勤）を対象としたアンケートをWEB上で実施しました。

### 省エネパトロールの実施

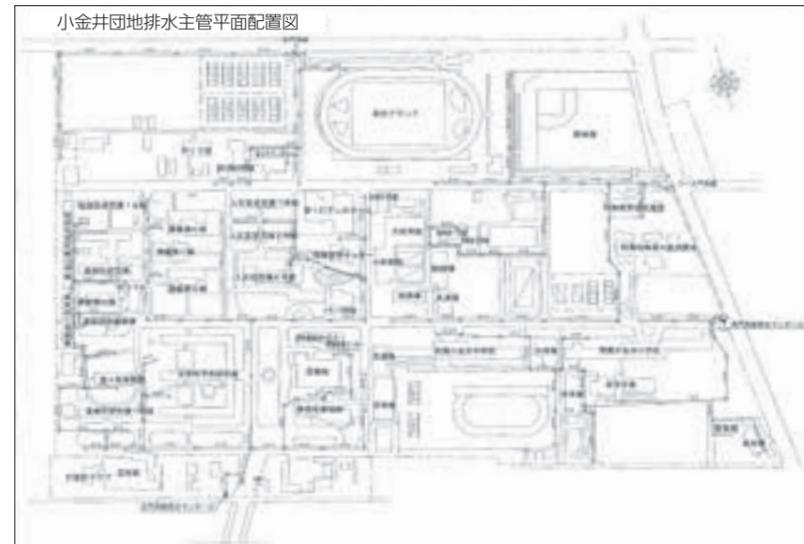
各部局等における適切な省エネ実施状況の把握及び省エネ活動の推進を目的とし、地球温暖化対策推進員及び施設課により適宜、省エネパトロールを実施しました。

### 契約電力オーバー予測時の対応

学芸ポータルトップ画面の電力使用率率が98%以上になった場合は、小金井団地の事務室、研究室等の空調・照明停止の要請をする。

## ■ 排水の管理について

大学からの排水が原因で、環境を汚染しないように小金井市の下水道への放流地点を定期的に検査しています。検査の結果、排水中の全窒素の濃度が基準値を超過していることが、定期自主検査により判明しました。トイレの排水が主たる原因であったため、採水場所に接続している全ての建物について、1日2回（午前・午後）で調査を行い、原因となる建物の特定を行った。分析の結果、講義棟からの排水が原因と考えられたため洗浄水量の調整を行い、改善を図りました。



## ■ PCB 廃棄物について

PCBとはPoly Chlorinated Biphenyl（ポリ塩化ビフェニル）の略称で人工的に作られた、主に油状の化学物質です。

その有用性から広範囲に使用されるも、その毒性が明らかになり1972年に製造が中止になりました。平成13年に「ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法」（PCB特措法）が施行され、事業者は適切な処理を行うことが義務づけられています。

PCB廃棄物は高濃度PCB廃棄物と低濃度PCB廃棄物に分類されます。

	高濃度PCB廃棄物	低濃度PCB廃棄物
定義	PCBを使用した電気機器廃棄物（PCB濃度が5,000mg/kgを超えるもの）	微量PCB汚染廃電気機器等：非意図的にPCBが混入した廃棄物 低濃度PCB含有廃棄物：PCB濃度が0.5超～5,000mg/kgの廃棄物
処理先	中間貯蔵・環境安全事業（株）（JESCO）	無害化処理認定施設 PCBに関する特別管理産業廃棄物処理の許可施設

### PCB 保管及び処分状況について

PCB特措法に基づき、PCB廃棄物の可能性がある廃電気機器、廃油、汚染物（ウエス、汚泥等）についてPCB含有の有無を調査・分析し、PCB廃棄物の場合、保管および処分状況、使用機器などについて東京都知事に毎年届出書を提出しています。

平成27年度	PCB・NONPCBの分別	
平成28年度	低濃度PCB処分	
	PCB汚染物（変圧器）	36台
	PCB汚染物（コンクリートガラ他）	13個
	廃PCB等（オイル）	1缶
	合計	10,788.6kg

本学では高濃度PCB廃棄物を3年間（平成29～31年度）に分けて処分を行うことになっており、下記の処分計画に従い、手続を進めています。

平成29年度～31年度 高濃度PCB廃棄物処分（平成30・31年度は予定）※

処分量 (kg)	平成29年度	平成30年度	平成31年度	合計
	3,738 【小金井(その1)・附高・世小・竹早】	1,853 【小金井(その2)】※	5,530 【小金井(その3)・大泉】※	11,121



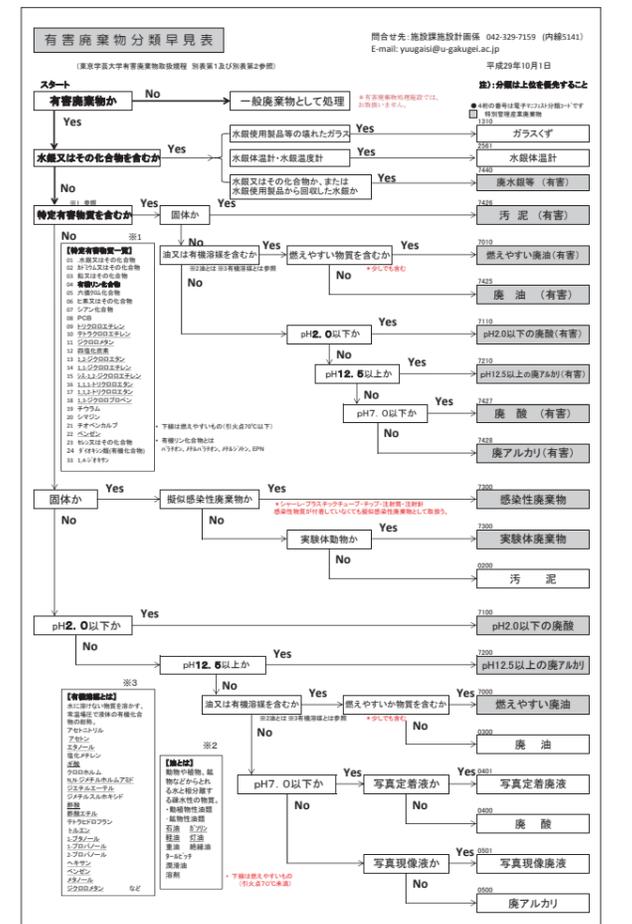
低濃度PCB廃棄物搬出の様子

## ■ 有害廃棄物処理について

本学の教育・研究活動で生じた有害廃棄物を収集し、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に基づき、実験廃液等を一時保管し、外注委託によって適切に処理を行っています。



平成26年度までは、平成16年4月作成の「有害廃棄物分類早見表」により分類をしてきましたが、本学特有であるため、東京都や処理業者が使用する分類と異なり、受入時と処分時の名称、数量の突き合わせ確認が困難でした。平成27年度から平成29年度にかけて分類を、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」や財団法人日本産業廃棄物処理振興センターが使用している分類と整合性をとるため「有害廃棄物分類早見表」を修正しました。



学芸の森推進部門長 岩元 明敏  
広域自然科学講座 准教授



## 学芸の森推進部門の活動について

本部門では、学生、教職員、そして地元住民の皆さんの大学内の植物への知識、関心を深め、東京学芸大学が有する豊かな自然、すなわち「学芸の森」を維持し、さらには発展させることを目指した活動を行っています。2015年から「学芸の森講習会」と銘打った学生、教職員、地元住民を対象とした参加型の講習会を年4回のペースで行い、主に正門前サクラ並木の整備や花壇への植栽などを行ってきました。昨年度から活動範囲をプレイパークにも広げ、すでに2回の講習会を行っています。また、昨年から4月初旬に主に地元住民を対象とした学内のサクラを活用した部門主催の公開講座「お花見学入門」も実施しており、本年度（2018年度）で3回目の開催となりました。今後もこうした講習会、公開講座を通じて「学芸の森」を推進していきたいと考えています。

今回は、前年度の環境報告書2017で報告した2017年7月の第2回学芸の森講習会以降の部門の活動について以下の通り報告します。

### 活動報告1

#### 2017年度第3回学芸の森講習会 「正門前通り小金井ザクラの植え替え」



日時：2017年12月13日（水）13:00～14:30

場所：東京学芸大学正門前サクラ並木

講師：新井孝次郎（樹木医）

出席者数：本学教職員5名、学生3名、地域住民2名  
（計10名）

内容：樹木医の新井講師による指導の下、東京学芸大学施設課作成の東京学芸大学サクラ並木保全計画案（平成29年8月2日作成）に基づき、小金井ザクラ（ヤマザクラの一種）の幼木2本（高さ2m程度）の植え替えを行いました。この2本はそれまで大きなサクラの樹のすぐ横に植えられていたため、近い将来枯死してしまうことが予測されていました。

本講習会では、講師の指導を受けながら、参加者が協力して対象となる樹を根もとから掘り起こし、よりスペースのある場所に植え替えました。さらに、必要な添え木も行いました。植え替えたサクラは定着し、これま

でのところ（平成30年6月29日現在）順調に生育しています。これで2016年11月30日実施の学芸の森講習会での植え替えと合わせて計4本の小金井ザクラの植え替えを完了しました。

施設課作成の保全計画にある植え替えが必要な樹は残り2本であり、これについては2018年度と同じ時期（11月-12月）に植え替えを行う予定です。



講習会の様子（左が講師、右が参加学生）

### 活動報告2

#### 2017年度第4回学芸の森講習会 「正門前花壇の整備」



日時：2018年2月7日（水）13:00～14:30

集合場所：東京学芸大学正門前花壇

講師：新井孝次郎（樹木医）

出席者数：本学教職員1名、学生3名、地域住民2名  
（計6名）

内容：正門前の花壇はいわば東京学芸大学の「顔」とも呼べるスペースであるにも関わらず、ほとんど整備が行われていない状態です。学芸の森推進部門では、現在年に2回のペースでこの花壇の植栽の整備と植え替えを行っています。

今回は、樹木医の新井講師による指導の下、正門前花壇の植物の剪定と除草を行うとともに、新たな植物を植えました。今回植えた植物は、ピオラ、パンジー、カルーナ、ローダンセマム、花かんざし（キク科 *Rhodanthe anthemoides*）、葉ボタンでした。

日当たりが良く、乾燥しにくい手前側にピオラ、パンジー、ローダンセマム、花かんざしを、奥（看板付近）の日当たりが悪く、乾燥している場所（上にクロマツが

張り出しているため、雨が落ちず乾燥しやすい）にカルーナと葉ボタンを植えました。植えた後、各植物の根元に水が少し浮いてくるまで集中的に与え、周りを軽く踏み固めました。今後、こまめに水やりが必要とのことでしたので、参加学生とともに今後の水やりの計画を立てました。

なお、講習会前に地上部が残っていた植物は、クリスマスローズ、アリッサム、アカンサスのみでしたが、このうちクリスマスローズについては新芽が展開し始めている場合、古い葉は切除しても問題ないとのことでしたので、全て除去しました。

今回の講習会により、春の卒業・入学シーズンに向けての正門前花壇の適切な整備を行うことができました。



講習会の様子（右が講師、左が参加学生）

### 活動報告3

#### 2018年度公開講座「お花見学入門」



日時：2018年4月5日（木）9:00～12:30

場所：東京学芸大学構内

講師：岩元明敏（本学教員・機構員）、高坂憲二郎（地元住民・機構員）、新井孝次郎（樹木医）

出席者数：地域住民13名、講習補助学生1名

内容：一昨年、昨年に引き続き、学芸の森推進部門員の教員（自然科学系・岩元）を主担当講師として、地域の方を対象に学内のサクラを用いた花の観察と種の同定方法に関する公開講座を行いました。なお、部門員である高坂憲二郎氏に加え、樹木医の新井孝二郎氏を外部講師として招けました。

今回、テキスト代などの関係から受講料が前年より上がってしまいましたが（2017年度1000円→2018年度2000円）、受講者募集に対して地元小金井市から14名の応募があり、最終的に13名の方が受講しました。

当日は、まず講義棟内の教室でサクラの形態的特徴、分

類についての講義を行った後、構内に出てサクラの観察と採集を行いました。満開がその前の週だったためにサクラの花が残っているか心配されましたが、オオシマザクラ、ヤマザクラ、カスミザクラ、ワカキノサクラ（ヤマザクラの変種）、ソメイヨシノ、エドヒガン（シダレザクラ）、サトザクラ（普賢象）、カンヒザクラ×オオシマザクラ（陽光）、ニワザクラ、ニワウメ、ハナモモといった広義サクラ属の花を観察することができました。

さらに、採集した花を教室に持ち帰った後、受講者は講師のアドバイスと配布された検索表を参考にして種の同定に取り組みました。30分ほどの同定作業で受講者全員が正しい同定を行うことができました。同定終了後は外部講師の新井氏によるサクラの病害虫に関する講義が行われました。

公開講座終了後に行ったアンケートの結果では、「参加費用が高い」とのコメントが1名だけありましたが、それ以外はサクラについての知識が深まって良かったなどの講座を評価するコメントでした。全体として受講者の満足度は高かったと思います。費用面については来年度以降の課題にしたいと思っています。

### 今後の活動について



学芸の森推進部門では、2018年度も4回の講習会を予定しています。第1回の講習会は夏に向けた正門前花壇の整備で2018年7月9日（月）に実施しました（活動報告については来年度の環境報告書で行う予定です。）また、第2回講習会としては7月～8月の間にプレイパークでの講習会を、第3回講習会は12月に小金井ザクラの植え替えを予定しています。2019年2月には本年と同様に春のシーズンに向けての正門前花壇の整備に関する第4回講習会を行う予定です。

学芸の森推進部門の公開講座、講習会は本学の教職員、学生、地元住民の方どなたでも参加することができますので、ぜひ積極的に参加頂き、学芸の森を考えるきっかけにいただければと思います。講習会などに興味のある方は学芸の森推進部門の岩元（akitoshi@u-gakugei.ac.jp）までどうぞお気軽にご連絡下さい。講習会の日程などをお知らせいたします。

1. 環境教育「はじめの一步」～りゅうのひげの植込み・育成・カバープラント化活動～

環境学習推進部門員 中村 純子  
日本語・日本文学研究講座 准教授

S 講義棟南側の自転車置き場に細長い花壇があります。幅50cm、長さが17.1mと14.4mの二つです。設置当初は何か植えられていたのかもしれませんが、夏には雑草が高く生い茂り、荒んだ様子になっていました。そこで、環境学習推進部門では、いつも雑草だらけのこの花壇を、癒しの空間に、そして環境教育の『はじめの一步』という想いから、この花壇の改善に取り組むことにしました。

まず、何を植えるかです。何よりも耐久性があり、手入れが簡単なものです。宿根草で花が楽しめるものがないのではと、ラベンダーや水仙など、いろいろ候補がありました。その中で、図書館前の花壇に植えられている「りゅうのひげ」に着目しました。

「りゅうのひげ」はキジカクシ科、ジョノヒゲ属の耐寒性常緑多年草です。原産地は日本、朝鮮半島、中国です。濃い緑の細長い葉が10cmくらい、こんもりと丸く生い茂ります。開花期は7～8月頃で、白か紫の小さな花が咲きます。リュウノヒゲを植え付けると、雑草が生えにくくなるそうです。雑草の手入れに困っていた時はグラウンドカバーとして植えるのと良いと言われていて、まさにこの場所にとってつけです。

学名は“Ophiopogon japonicus”です。ギリシャ語の“Ophio”（蛇）と“Pogon”（髭）が組み合わされ、原産地の日本という言葉が組み合わされてきたようです。和名のジャノヒゲを直訳したものと云われています。しかし、実はもともとは“蛇（ジャ）”ではなく、“耐（じょう）”という老人の能面のご髭、“耐（じょう）の鬚”をみたくたもったそうでした。もとの“ジョウノヒゲ”が転じて、“ジャノヒゲ”になり、さらに“蛇”が転じて、“竜”となったようです。

英名は“Dwarf mondo grass”です。“mondo”はフランス語で“世界”を意味する monde からきているそうです。つまり、世界中どこにでも生えるという意味です。

花言葉は「変わらぬ想い」「深い思いやり」。まさに教員養成の本学にふさわしいものです。こうして、この活動を「りゅうのひげ」プロジェクトと名付けました。

ポスターで参加者を呼びかけたところ、国語科教育から2名、学校心理から4名、家庭科教育から6名の学生が集まってくれました。11月11日は少し寒くなっていましたが、天気はよく、作業を進めるにつれ、少し汗ばむくらいでした。初めの固く雑草の覆われた土を掘り起こす作業は大変でした。大きな石や自転車のベルなどのいろいろなゴミを取り除く作業に手間取りました。苗の植え付けでは、学芸の森環境機構の高坂氏のアドバイスで幅4列で密度を詰めて植えていきました。この時、シャベルが人数分足りませんでした。そこで、部門員の南先生のアイデアでペットボトルを使ったリサイクル・シャベルを作りました。1リットルサイズのペットボトルの底をカッターで斜めに切ります。キャップのついている飲み口の部分を握ると簡単なシャベルのできあがりです。苗付け分の穴を掘るのに適していました。楽しくおしゃべりをしながら、作業を進めることができました。ところが、用意した200株では花壇を埋め尽くすことができませんでした。

そこで、翌年、2018年2月14日、第二弾「りゅうのひげ」プロジェクトを開催しました。買い足した苗の数は320株。再度、集まってくれたのは、国語科から3名、学校心理から3名、家庭科から6名の学生でした。真冬の候

で、雪の溶け残りが凍っていましたが、幸い、晴天に恵まれ、ひなたぼっこをしながら暖かさを感じながらの作業となりました。ほんのひとときの作業でしたが、学生にとっても良い思い出となるものだったと思います。

「りゅうのひげ」はどんな環境でも丈夫に育ち、枯れる心配のない植物ですが、人に踏まれるのは苦手なようです。そこで、次年度は自転車が乗り上げてこないように花壇の周囲に柵を設置する予定です。また、苗が育って、花壇一面を埋め尽くすまで、定期的な手入れを続けていく予定です。その想いを示す記念プレートの設置も予定しています。



11月11日



2月14日

2. キャンパスクリーンデー彼や此れや



学芸の森環境機構長 渡辺 雅之  
健康・スポーツ科学講座 教授

昔日のこと、ある日の午後キャンパス内が騒がしい。何だろう？事務方が大挙してスポーツウェアに軍手、箒やリヤカー等を駆使して活動している。村松学長（当時）も一緒にやっておられるではないか。それにしてもこういう時のスポーツウェアには違和感が強い。これは何？やがてキャンパスクリーンデーなることを知る。教授会で報告があったって！？そんなものは全く耳には届くはずもない。これが私の現実である。

そんな己が本機構員にならさせられて（講座主任の説明では年6回の会議のみとのこと）、実態に初めて触れ、驚愕した。ある時の機構会議でキャンパスクリーンデーが狙上に。某機構員（教員）がこれを揶揄するかのよう発言したことに対し、怒号が飛んだ。「だいたい教員も学生も出て来ないじゃないか。まずは学生を指導して一緒に参加してからモノを言え。」聞けば、その時の前年度の参加状況はゼロに近いものだったそう。なるほど怒号の謎が解けた。

機構長から環境学習推進部門としてこれに取り組んでほしいと要請があり、広報をしたり、鉋や鎌等の小道具の準備を総務課主催の行事である以上これに協働する形で関与した。そうした結果、当日の教員・学生の参加はゼロではなくなった。正門前に看板を設置しての広報は効果大と期待したがそれほどのもななかったようだ。

年2回のキャンパスクリーンデーは7月と12月である。7月開催は月末のオープンキャンパス前の美化を狙

い、12月は落ち葉清掃が主な狙いである。昨年度の参加状況は、7月が、教員9名、学生48名（うち近隣の子ども2名）、12月が教員8名、学生19名、近隣地域の親子4名であった。この数字は当日開始時点での受付人数なので、それ以後に参加した者は含まれていない。おそらく微増はあるのであろうか。

キャンパスクリーンデーに関して学生の情報を集めると、ポータル告知ではまず反応は乏しいとのこと、指導教員からの連絡、告知、参加要請などはほとんどないようである。学内美化の意味は分かるけれど自分にとって身近なものではない印象とのことである。

これまでも本部門では学生はもとより教員の帰属意識を高め、オーナーシップの醸成に訴えかけようとしているが道は未だ険しである。自分自身が機構側になって初めて気が付いたこと故、他人を責めるきはさらさない。そこで他部門と共同してボランティア組織化の方策を練ってきた（環境報告書2017の「学芸の森ボランティアの会規約草案」参照のこと）ものの、会そのものは未だ起動せずである。が、万策尽きた感は全くない。希望は捨てない。学長の巻頭言にええんと。

ウッドデッキの落ち葉拾いをした方が、ベンチに座ってスマホを見ていた学生と思われる方が箒が近づいてきた時に足だけをひょいと挙げて顔も上げずにやり過ごした態度に「ここは教員養成の学校じゃないのか！」と心の叫びをあげたことを語ってくれた。

環境改善企画部門



環境改善企画部門長 白倉 美里  
外国語・外国文化研究講座 准教授

環境改善企画部門では、2017年9月に植物ハザードマップ作成のための調査を行いました。小金井地区構内を部門員と施設課担当者等の関係者数名で見回り、構内環境で危険を伴いそうな場所や、植物の植生を脅かす可能性がある場所を確認しました。昨年度に作成したハザードマップで挙げられた問題点が解決されたかどうかを中心に確認しながら、新たな問題点がないかを調査しました。

放置されていた枯れ枝や人工芝ロールなどの撤去作業が進んでいたのは、昨年度からの改善点でしたが、一方で根本が腐りかけていたり、枝が枯れて今にも折れて落ちてきそうな樹木があり、近くを通る際に危険を伴う場所も散見されました（詳細は次ページの植物ハザードマップ参照）。来年度以降も引き続き、構内環境改善への提言の

ために、ハザードマップ作成を継続していく予定です。

2017年12月には、万葉池のかいぼりを行いました。環境教育研究センターの教職員の方、施設課の職員の方、そして環境教育専攻・選修の学部生や大学院生の皆さんにお力添えいただき、作業を進めました。まずは万葉池の水を抜き、池に生息するドジョウやヤゴ、メダカといった生物を水槽に一時的に移動させました。次に、みんなでバケツリレーをして泥水をさらい、池の底にたまった泥をかき出しました。その後、1週間ほど池を天日干しした後、水を入れ直し、採捕した生物を池に戻しました。今回のかいぼりできれいになった万葉池の環境を保全・維持するために、来年度の秋頃に落ち葉さらい等を行う予定です。



学芸大  
植物ハザードMAP  
2018.1

万葉池の  
かいぼり



かいぼり前の万葉池



池の水が抜かれた状態の万葉池



一時的に採捕された生物たち



万葉池の底にたまった泥をかきだす



バケツリレーで池の底にたまった泥水を運ぶ

学芸の 緑あふれる 憩いの森 みなで守ろう 手をとりあって



環境創造地域連携部門長 森山 進一郎  
健康・スポーツ科学講座 准教授

学芸の森という環境を、地域と大学とが手を取り合っ  
て守る組織の整備、これが環境創造地域連携部門に課せ  
られた使命だと思っています。昨年度まで幾度となく積  
み重ねてきた会議での意見を礎に、学芸の森ボランティ  
ア組織がようやく発足致しました。ボランティア組織構  
成員を円滑に統制するために、まずは大学内を活動拠  
点としている地域の団体を中心に組織へ登録していただ  
きました。その団体の一つ、「つながりの杜 En」の活動  
が、小金井市観光まちおこし協会の発行する「まるん通  
信 Vol.8」に取り上げられました。この記事を読み、東京  
学芸大学の緑あふれるキャンパスが、小金井市の観光ス  
ポットの一つに、市民の方々が気軽に活動できる場とな  
る、そんな日が来ることを期待したくなりました。

本学キャンパスの広大な敷地には、様々な木々や草  
花が至るところに存在します。そんな美しいキャンパス  
を、一人でも多くのサポーターとともに、これからも維  
持、改善したいと考えています。それらの活動をより円  
滑にする術の一つとして、いくつかの市民団体が活動す

る若草研究室の外部に水道と倉庫が新たに設置されまし  
た。大切にすること、手入れをすること、これらは愛着  
を高めることにつながります。まずは年2回行われる学  
内キャンパスクリーンデーが、本学の職員、教員だけで  
なく、多くの地域の方々や学生が参加するイベントへと  
進化させたいものです。そういった活動一つ一つが、学  
芸の森ボランティアをなお一層盛り上げてくれるものと  
期待しています。



若草研究室に設置された水道と倉庫

参加しませんか? いけとおがわプレーパークの大掃除



NPO こがねい子ども遊パーク代表理事 邦永 洋子

「いけとおがわプレーパーク」では、毎年7月の末に3  
日間かけて「いけとおがわ大掃除」を行い、普段活動に  
使わせていただいている池や周辺の環境整備を実施して  
います。

参加するのは、遊びに来た子ども達と保護者、そし  
て心ある地域の皆さんです。大きなブルーシートと木枠  
で即席の水槽をつくり、前日から池の水をポンプでくみ  
上げ水が少なくなったところで、堆積した泥や落ち葉を  
フォークと呼ばれる道具やシャベルで持ち上げます。大  
きなとがった石、投げこまれたプレーパークのままごと

道具、シャベルなど危険なものから掘り出し物まで、大  
人も子どもも力仕事に励みます。生き物はブルーシート  
の水槽に避難させます。

面白いようにザリガニが捕れるのでそのうち池に入る  
担当と水槽に運ぶ担当など子どもたち同士で役割分担を  
しだすのも面白いです。お昼にはボランティアの皆さん  
がおいしい炊き出しを用意して下さるのもうれしいこ  
とです。大人は毎回ぐったりこのかいぼり作業ですが、  
楽しく安全に遊ぶためにも、また、生き物や環境保全の  
ためにも続けています。



小さなガーデンの大きな喜び



つながりの杜 En 亀山 純子

「つながりの杜 En」では、毎月最終日曜日を定例会として学内の畑や田んぼでの作業を行っています。田起こしなど必要があるときは毎週集まって作業することもあります。今年度から家族のグループも増えて、皆さんそれぞれのペースで、賑やかに活動しています。

去年収穫した種籾を蒔くところからもち米づくりが始まり、平日はお母さんと子どもたちが交代で苗に水やり。田植え後の田んぼの水やりは真夏の暑い季節にも続きます。いちからの米作りとそのお世話、日々田んぼへ足を運ぶことは大人にとっても子どもにとっても、本当に貴重な体験として蓄積されています。

若草ガーデンでは「食べられる庭」づくりというテーマのもと、春はふきのとうに始まり、こごみ、のびる、のらぼう、春菊、ルッコラ、なす、インゲン…自然に出てきたものやちょこっと場所を作って耕し育てたもの、四季を感じながらいただく食べものは、とても豊かな食

卓をつくってくれます。どくだみがたくさんあるときはお花を摘んでかゆみ止めを作ってみたり、舗装された道では出会えない、巨大なみみずに出くわしたり…小さな庭では本当に心地よい時間が流れています。

冬の生き物も静かな時期には味噌づくりや包丁研ぎのワークショップを開催。春はガーデンで収穫したジャガイモとハーブを使ってコロケパーティー。夏はガーデンで育った丸葉藍で生葉染めなどなど、四季折々の手仕事もみんなで共有し、一緒にランチを囲んで楽しめます。なんといっても一番の楽しみは収穫したもち米での餅つき大会！その美味しさに、「来年も頑張るぞ！」と力をもらいます。来年の種籾を残しておくことも忘れずに。

1年が終わり、祭りが終わってガーデンにまた雪が積もれば、元気に子供たちが駆けまわり、暖炉の前には冷えた小さな足とかわいい靴下、みかんが並びます。また春が来ます。



つながりの杜 En

事業活動に関わるエネルギー・資源の全体量

電気・ガス・水道などの地球環境に影響する使用量および支出額のデータを比較表にして、学内へ定期的に通知し、その増減状況の共通理解を得ることにより、省エネの意識向上を図っています。

以下に環境パフォーマンスの取り組みデータを示します。

重油 総エネルギー投入量 (ℓ)

CO<sub>2</sub>排出量の削減対策として、重油ボイラから高効率のガス・電気式の空調設備へと切り換えを進めています。重油焚暖房ボイラを廃止した結果、重油の使用量がなくなりました。



ガス 総エネルギー投入量 (千m<sup>3</sup>)

本学では、冷暖房期間の電力ピークカットのため空調設備の一部にガスを利用した空調設備を導入しています。空調設備の改修に合せ老朽化した空調設備を高効率の空調設備に更新していますがボイラ廃止のため増えています。



電気 総エネルギー投入量 (MWh)

機器の更新にあわせ高効率の機器の導入を推進しています。



太陽光発電量 (kwh / 年)

※小金井地区とする。(芸術・スポーツ科学系研究棟 30kW、総合教育科学系研究棟 3号館 5kW、附属小金井中学校 20kW)

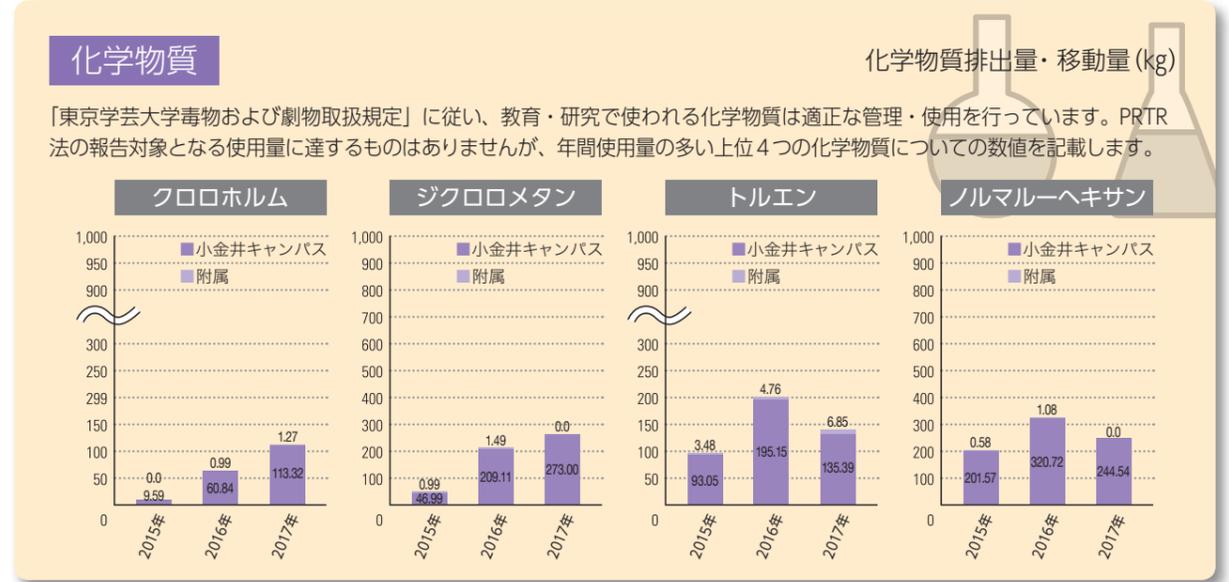


INPUT	
電気	8,283,000kWh
ガス	600,341m <sup>3</sup>
重油	0ℓ
水	128,273m <sup>3</sup>
紙など資源	19,154,000枚

OUTPUT	
温室ガス (CO <sub>2</sub> 換算)	5,310t
一般廃棄物	346,697kg
排水	128,273m <sup>3</sup>

環境保全効果

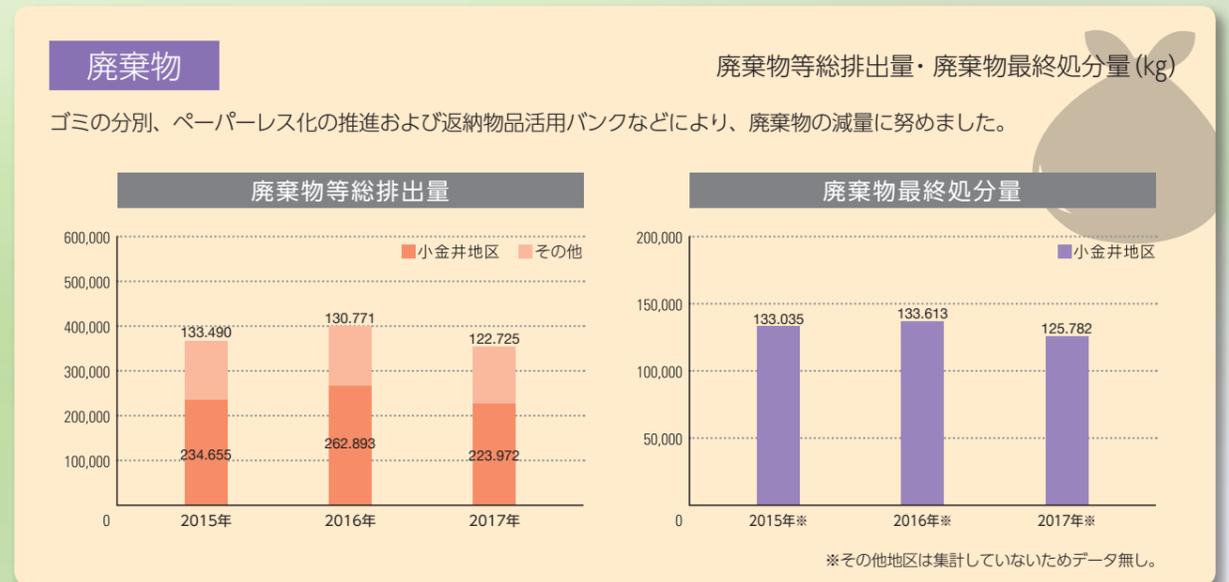
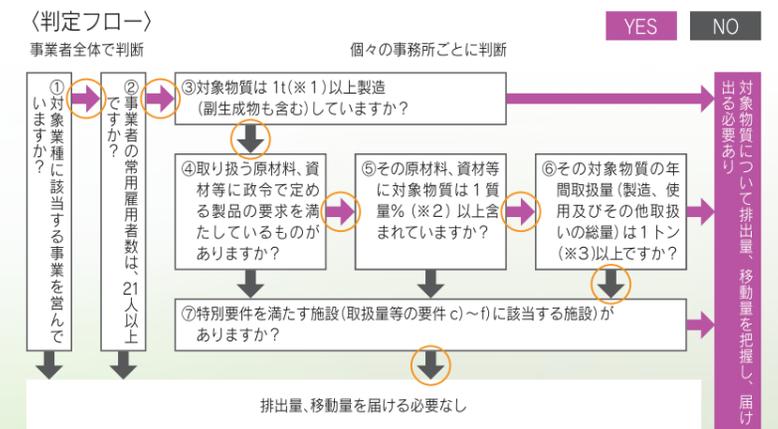
環境パフォーマンス指数	前年比
エネルギー使用量 (GJ)	0.99
水資源使用料 (m <sup>3</sup> )	0.98
温室効果ガス排出量 (t-CO <sub>2</sub> )	0.96



2017年度 PRTR 対象物質の集計結果について

本学の対象取扱量は、右図⑥⑦の要件を満たさなかったため、排出量・移動量について報告は行いません。しかし、PRTR 方は環境に負荷をかける恐れのある化学物質の動向を把握することが目的であるため、今後も薬品庫などの管理に十分留意し、報告を行う基礎を確立する必要があります。本学の集計結果の内訳は HP に掲載してありますのでご確認ください。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~yuugaisi>



## 環境教育研究センター教授 吉富 友恭

### 農園（教材植物園）へ行ってみましょう！

みなさんは大学構内の北西エリアにある環境教育研究センターの農園（教材植物園）に足を運んだことがあるでしょうか。案内板のある入り口から緩やかなアーチを描く遊歩道に沿って進むと、手入れされた芝生、田畑や果樹園、温室などが目の前に広がります。

ここでは学生や教職員、地域の方がのんびりと散歩や休憩をしていることも多いのですが、授業や行事で自然体験の機会を提供するとても貴重な場所で、動植物を観察する、育てる、収穫する、素材を集めるなど、多様な活動を行うことができます。

農園で行われている授業や行事など、いくつかの活動の様子を写真でご紹介しましょう。

### 環境教育研究センターの取り組み

農園は環境教育研究センターが管理・運営しています。環境教育研究センターは環境教育の内容・方法などに

関する研究とその普及を図ることを目的として、1994年に付属野外教育実習施設（1987年設置）から改組、拡充されました。現在、専任教員を中心に「環境教育研究部門」「野外教育研究部門」の2部門を、学部や附属学校の兼任教員の方々と一緒に運営しています。

学部学生に対しては、環境総合科学課程（F類）環境教育専攻、及び、初等教育教員養成課程（A類）環境教育選修の教室運営に関わり、フィールド体験を重視した多彩な授業を提供しています。また、大学院総合教育開発専攻環境教育サブコースの運営にも関わり、環境教育の理論や方法、実践的な研究も進めています。

プロジェクト事業も多く、文部科学省「環境のための地球規模の学習及び観測プログラム」（GLOBE）、米国コカ・コーラ財団「水辺の学びデザインプロジェクト」（WaSIT）の委託事業、環境教育リーダー養成講座、環境教育セミナー等も行っています。他にも、学校や地域と連携しながら、環境教育に関連した様々な取り組みを進めています。



雪景色の農園



授業風景



竹で流しそうめん



サトイモ掘り



仔ヤギ



春の農園



パン窯を使った調理



田んぼの生き物観察



春の野草を味わう会



多目的教室でのセミナー



農園の入り口



ウッドデッキでの団楽

### 環境教育研究センター農園（教材植物園）での活動風景

教材植物園の利用については、環境教育研究センターのウェブサイトをご参照下さい。http://www.fsifee.u-gakugei.ac.jp/

# 第三者意見

## 「東京学芸大学環境報告書 2018」によせて

小金井市は、平成30年10月1日に市制施行60周年を迎えました。市制施行時には約4万人であった人口は、平成29年10月には12万人を突破し、武蔵小金井駅南口の再開発等、まちづくりが進んでいる中で、市内には小金井公園、武蔵野公園、野川公園の3つの都立公園をはじめ、国分寺崖線（はげ）や野川、玉川上水などの豊かな自然が多く保全されています。また、貴重な屋敷林や都市農地も多く残されており、長きに亘り守られてきた、この大切な財産を未来に引き継いでいかなければなりません。

しかし、一方で地球温暖化の影響が世界各地で見られ、日本でも、ここ数年、毎年のように局地的大雨による被害があり、猛暑日の日数が増加するなど、気候に影響がでています。わたしたちは、地球温暖化等、様々な環境問題に対して、皆で手をとり合って対策に取り組んでいくことが大変重要であると考えています。

本「環境報告書」を拝読し、省エネパトロールをはじめとした省エネ対策への取り組み、学芸の森を維持・発展させることを目指した様々な活動、学芸の森ボランティア組織の発足など、貴大学の幅広い環境保全活動に深い敬意と謝意を表すとともに、貴大学発の環境活動が、環境保全意識の高揚と環境行動をする人を増やすことに寄与し、次世代の学生、また地域住民に受け継がれることを期待しております。

小金井市環境部長 柿崎 健一

## 機構長より



正門前の花壇にはコンスタントに花が咲き、除草が施され、直上の大きな松の枝が払われた結果としての雨水の滴下、日光の照射も加わり、毎朝通るたびに定着しつつある活動に感謝している。南講義棟前駐輪場内の草地を雑草だらけから解放して玉竜によるカバー化を「りゅうのひげプロジェクト」と称して植え込みを行うも、隙間だけでなく玉竜の株間からも伸びる雑草の遅し、7月からの日照りに水撒きが追い付かずの状態にお手上げ寸前のプロジェクトに諦念すらも覚えたが何とか乗り切った感の昨今であった。やはり自然は甘くないの一言である。多くの環境問題の中でこうした一つ一つの積み重ねがやがて好循環を生じさせ、多くの人々の関心を呼び起こし、少しずつ大きな果実を結ばんと期待してやまないが道は今だ険しい感で一杯である。定年を間近に迎える身となった今、焦慮に駆られていることは否定しようがない。少なくとも本報告書づくりのプロセスには一定の進化があったことが救いであることは確信している。

学芸の森環境機構 機構長／芸術・スポーツ科学系教授 渡辺 雅之

### 環境配慮促進法（記載事項等に関する告示）準拠状況

番号	記載必須項目	掲載ページ
1	事業活動に係る環境配慮の方針等	表2
2	主要な事業内容、対象となる事業年度等	表2・02
3	事業活動に係る環境配慮の計画	表2・01
4	事業活動に係る環境配慮の取組の体制等	03
5	事業活動に係る環境配慮の取組の状況等	04・05・13・14・15
6	製品等に係る環境配慮の情報	—
7	その他	06～12・16

### お問い合わせ

財務施設部 施設課  
TEL 042-329-7160  
FAX 042-329-7168  
MAIL gakupuro@u-gakugei.ac.jp

本報告書に関するご意見、ご感想、ご助言などをお待ちしております。これまで発行した環境報告書は東京学芸大学のウェブサイトからご覧いただけます。

www.u-gakugei.ac.jp/jounhou/01/

### 東京学芸大学 環境報告書 2018

発行：学芸の森環境機構  
編集・印刷：有限会社サンプロセス